

第5章

その他

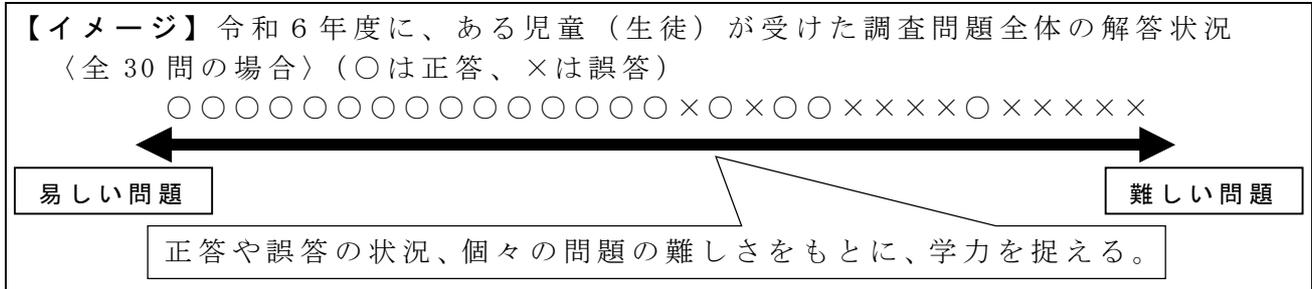
経年変化（学力の伸び）を測る埼玉県学力・学習状況調査の設計やよくあるQ & Aを掲載します。

また、授業改善に向けた「主体的・対話的で深い学び」の視点による質問調査の活用を図る校内研修資料も紹介します。

1 学力の経年変化（伸び）を見る調査の設計

(ア) 本調査における学力の捉え方

「どのくらい難しい問題に正答できるか」で学力を捉える。



① 学力の捉えについて

上の図のように、調査問題全体の中で難しい問題に正答し、易しい問題に誤答することもあるなど、児童生徒によって正答、誤答のパターンは様々である。そこで、どのような学力であれば、どのような解答パターンとなりやすいかということ、統計的手法を用いて推定し、その結果を学力として捉えている。

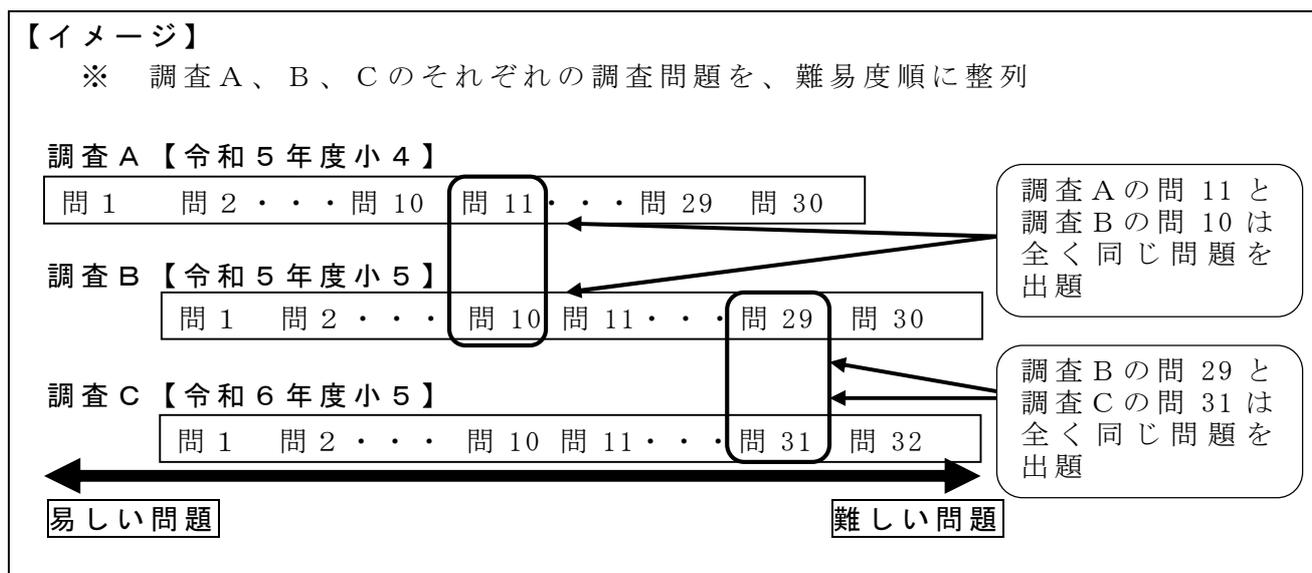
② 「問題の難しさ」で学力を捉える理由

全国学力・学習状況調査など、正答数（正答率）を学力の指標として使う方式は「いくつの問題に正答したか」で学力を捉えている。この場合、単一の調査の中で学力を比べることはできるが、小学校4年生と5年生など出題内容が異なる調査の結果から学力を比較することは難しくなる。

「問題の難しさ」をもとに学力を捉える方式は、次の(イ)に述べる工夫をし、異なる調査の問題の難しさを比較可能にした上で学力を捉える。

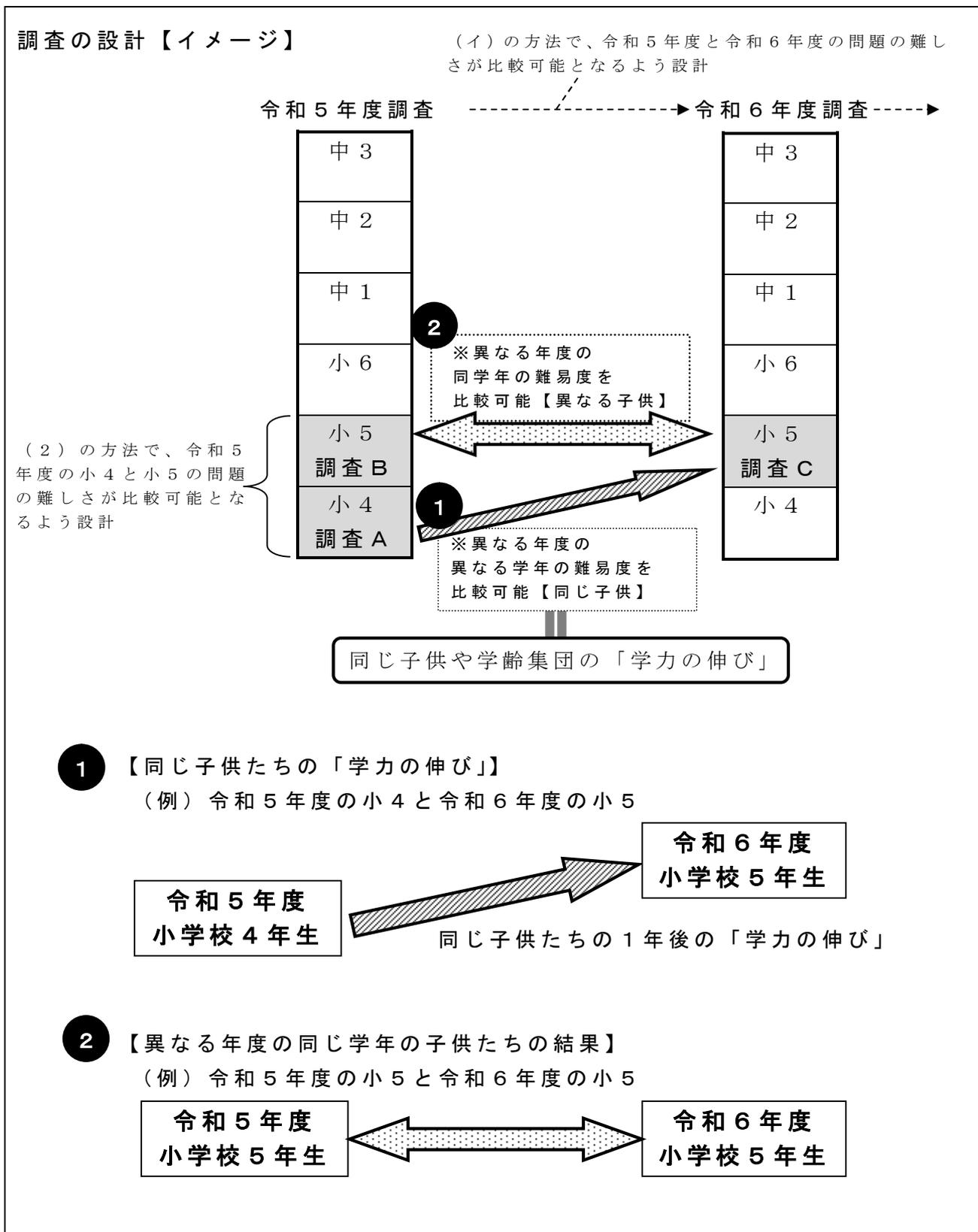
(イ) 年度や学年で、異なる内容の調査結果を比較するための工夫

それぞれの調査に「全く同じ問題」を一部出題し、その問題への正答や誤答の状況を手掛かりとして、すべての問題について「難しさ」を比較する。



(ウ) 埼玉県学力・学習状況調査の設計

(ア)、(イ)に基づき、本調査では、以下のような調査設計により問題の難しさを比較可能にして、それに応じて学力の経年変化(伸び)を見ることとしている。



(エ) 本調査における「学力の伸び」の捉え方

① 「難易度」について

本調査では、学力を「どのくらい難しい問題に正答できるか」で捉えるために、調査結果を分析し、全ての問題に難易度を設定している。

< 難易度の例 >

○ 例 1 計算問題 (割り算)

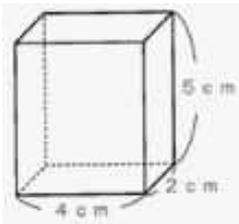
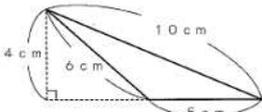
問題例	問題の難易度
$52 \div 4$	3
$5.6 \div 1.4$	4
$0.7 \div \frac{2}{3}$	6

整数同士の割り算である。
結果を分析し、問題の難易度は「3」となる。

小数同士の割り算である。
結果を分析し、問題の難易度は「4」となる。

小数と分数の割り算である。
結果を分析し、問題の難易度は「6」となる。

○ 例 2 求積の問題

問題例	問題の難易度
<p>次の図のような、たて、横、高さがそれぞれ 2 cm、4 cm、5 cm の直方体の体積を求めましょう。</p> 	4
<p>次の図は、三角形の面積を求めるために、直線の長さを測って書き入れたものです。この三角形の面積を求めましょう。</p> 	6

与えられた数値全てを使って体積を求める問題である。
結果を分析し、問題の難易度は「4」となる。

与えられた数値から必要な数値を取捨選択する問題である。
結果を分析し、問題の難易度は「6」となる。

② 「学力のレベル」について

様々な難易度の問題を出題し、それに対する正答や誤答の状況を見ることで、学力を判断している。

学力は、「学力のレベル」で表される。学力のレベルはレベル 1 からレベル 12 までであるが、各学年の測定は以下の表のように 7 レベルの間で行っている。

学年	学力のレベル	学年	学力のレベル
小学校 4 年生	レベル 1 ~ 7	中学校 1 年生	レベル 4 ~ 10
小学校 5 年生	レベル 2 ~ 8	中学校 2 年生	レベル 5 ~ 11
小学校 6 年生	レベル 3 ~ 9	中学校 3 年生	レベル 6 ~ 12

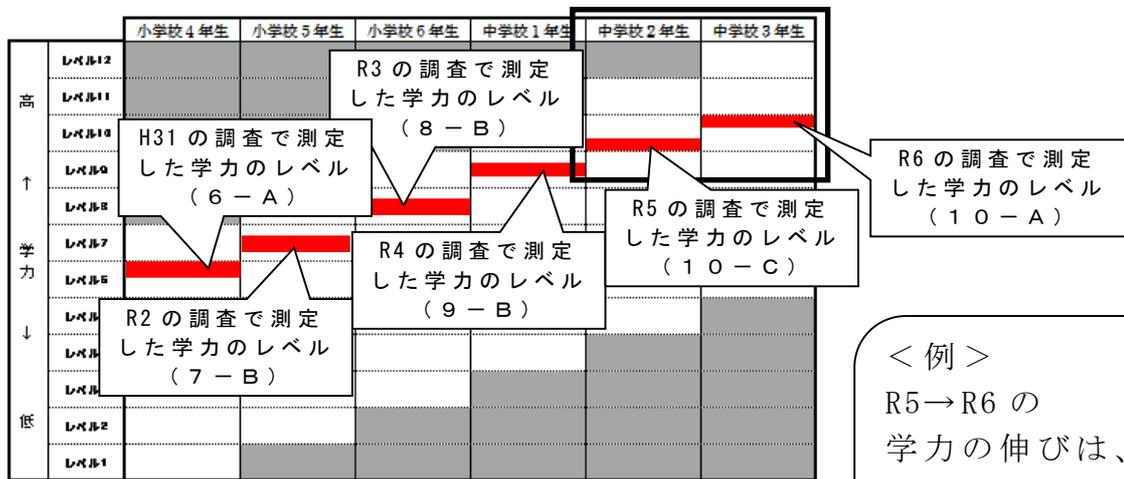
また、それぞれのレベルは、さらに細かく3層（高い順にA→B→C）に分かれており、同じレベルの中でもスモールステップで「学力の伸び」が分かるようになっている。児童生徒には、学力のレベルはこの小さな層で分けた1-Cから12-Aまでの36段階で提示される。

③ 「学力の伸び」について

本調査では、年度間の学力のレベルの差を「学力の伸び」と捉えている。下図は、個人結果票の一部を拡大したものである。児童生徒には、学力のレベルがバーの位置で示される。前年度のバーの位置と、今年度のバーの位置を比べると「学力の伸び」が分かる。

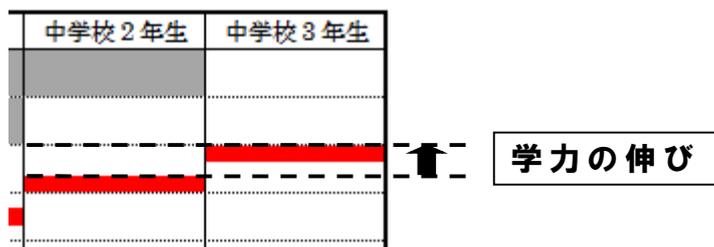
「学力の伸び」は学力のレベルを36段階に分けた中でのレベルの差で測っている。

< 学力のレベルの示し方の例（個人結果票の一部） >



< 例 >
R5→R6の
学力の伸びは、
10-Cから
10-Aで
2となる。

< 個人結果票・ 部分を拡大したもの >



2 調査に関するQ & A

(ア) 調査について

【Q1】

従来の調査と県学力・学習状況調査とは何が違うのですか。

【A1】

従来の調査は、学力を正答率で表すことが多く、調査年度の児童生徒の学力の現状を把握することには適していますが、実施年度が異なる調査の結果を比較しにくい課題があります。

そこで、県学力・学習状況調査では、異なる学年や年度間の問題の難易度を調整して学力を測定することにより、小学校4年生から、中学校3年生まで、児童生徒たちの学力が伸びていく様子をより明確に示すことができるようになっていきます。

【Q2】

県学力・学習状況調査の調査問題は、原則として非公開とされていますが、なぜですか。

【A2】

経年での伸びを測るために、同一の問題を年度を越えて出題する必要があることから、問題を原則非公開としています。

県学力・学習状況調査は、OECDの生徒の学習到達度調査(PISA)や、TOEIC、TOEFLなどと同様の分析手法を使っており、こうしたテストでも問題は原則非公開となっています。

なお、県学力・学習状況調査の類似問題等を基に作成した「復習シート」を県教育委員会ホームページに掲載しています。このシートは、家庭や学校で「学習した内容がしっかり身に付いているのか」の確認や、「一人一人の学力をさらに伸ばす」ことに活用できます。

(参考・県教育委員会ホームページ)

県学力・学習状況調査の「復習シート」について

<https://www.pref.saitama.lg.jp/f2214/gakutyous/images/fukusyuusi-to2.html>

(イ) 個人結果票の見方について

【Q3】

例えば、学力のレベル7で考えた場合、小学校4年生の学力のレベル7の児童と、中学1年生の学力のレベル7の生徒の学力は、同じと考えてよいのでしょうか。

【A3】

県学力・学習状況調査の「学力のレベル」については、学力のレベルが上がるほど難しい問題を解く力があると考えています。小学校4年生のレベル7と中学校1年生のレベル7では、正答できる問題の難易度は同じです。

ただし、小学校4年生の学力のレベル7の児童が中1のレベル7の問題を解けるかという、解けない問題もあります。これは、学習指導要領により学習内容が定められているため、中学校1年生のレベル7の問題を小4の児童はまだ習っていないためです。

【Q4】

前年度からレベルの数値が1上がると、該当学年内でのレベルの数値は低くても「大きな伸びが見られた」とコメントされていますが、なぜですか。

【A4】

本調査では、どの学力のレベルの中でも、数値が伸びているのであれば、児童生徒一人一人に伸びを実感させ、自信をもたせることが重要と考えています。

そのため、昨年度の自分と比較して、難易度が1レベルでも高い問題を解けるようになったことを「大きな伸び」と捉えてコメントしています。

【Q5】

例えば、中学校2年生での学力のレベルが5（中学校2年生の中では一番低い学力のレベル）の場合、学力のレベルが5より下のレベルがつけられない状態になっています。学力のレベルが5より下の場合は、どのように記載されますか。

【A5】

中学校2年生の調査において学力を測定できる問題の範囲は、レベル5からレベル11と設定しています。たとえ、問題に1問しか正解しなかったとしても、中学校2年生ではレベル5の学力がある可能性があるため、レベル5に位置付けられるようになっています。この場合、レベル5を明らかに下回るのは、正答数が0問の場合であり、その場合は、レベル自体が記載されないこととしています。

(ウ) 個人結果票の返却について

【Q6】

個人結果票を児童生徒に返却する際、どんなことを伝えればよいですか。

【A6】

本調査は、過去の自分の学力と現在の学力を比較できる設計となっています。一人一人の児童生徒に対して、学力の変化の状況についての適切な働きかけを行うことにより、今後の学力向上につなげていただきたいと思います。

①「今までの学力の変化」を確認し、学力が伸びた児童生徒に対しては、④「学習に関するアドバイス」を参考にしながら、1年間の頑張りを認めたり、ほめたりすることで、自信をもたせてください。また、学力が伸びていない児童生徒に対しては、教育相談などを行うことで、つまずきや悩み等を共有し、取組について丁寧な見取りなどを行うことで、今後の学力向上につなげてください。

児童生徒の解答状況については、②「教科の領域別正答率」の数値や、③「県平均と比べて時間をかけた問題」を参考にしてください。これにより、児童生徒が解答に困った、迷ったと考えられる問題を抽出し、その類似問題の復習を促すことができます。また、「領域別のかけた時間」では児童生徒が時間をかけた領域を把握することができるため、個々の課題を可視化することができます。調査問題については、本調査の設計上非公表となっていますが、県ホームページ上に「問題概要」や「復習シート」(類似問題)を掲載しているので、それらも活用してください。

返却する際、保護者も同席している場合には、可能な限り時間をかけていただき、児童生徒の「学力の伸び」やよさや課題を丁寧に伝えてください。そのうえで、伸びたところをほめたり、認めたりするとともに、苦手領域を中心に家庭学習を充実するよう伝えるようにしてください。

①今までの学力の変化

②教科の領域別正答率

③県平均と比べて時間をかけた問題

④学習に関するアドバイス

(エ) 結果帳票について

【Q7】

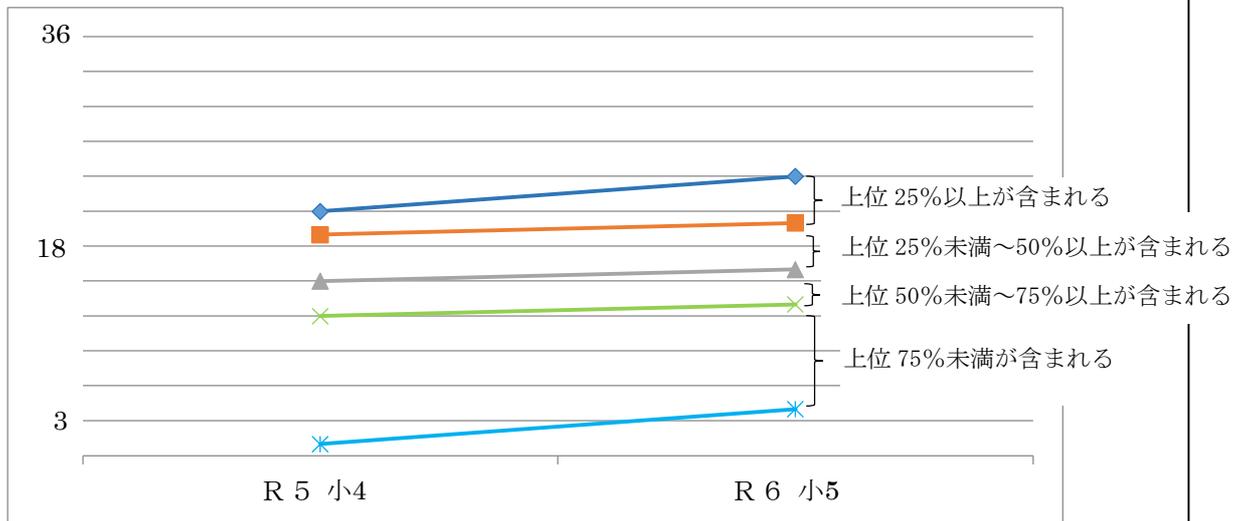
帳票の「28_各実施主体の調査結果票」の見方についてです。
線の傾きは何を表していますか。

【A7】

この帳票では、同学年の集団の中で、特定の位置にいる児童生徒（75%値に位置する児童生徒、中央値に位置する児童生徒、25%値に位置する児童生徒）の前年度と今年度の学力を示しています。5つの点は個人を表すので、集団の変化として捉えるためには、点どうしの幅に着目することが大切です。

前年度のそれぞれの位置を、今年度と比べることによって、この集団の学力分布の変化が分かります。

【グラフの見方】



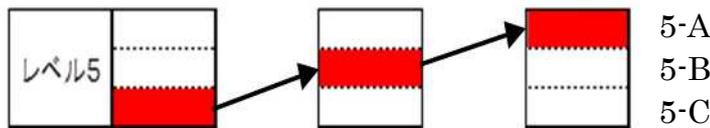
- ◆⇒ 最大値（最も学力が高い児童生徒が属する学力のレベル）
- ⇒ 75%値（学力を高い順に並べたときに、上から数えて25%にあたる児童生徒が属する学力のレベル）
- ▲⇒ 中央値（学力を高い順に並べたときに、上から数えて50%にあたる児童生徒が属する学力のレベル）
- ×⇒ 25%値（学力を高い順に並べたときに、上から数えて75%にあたる児童生徒が属する学力のレベル）
- ✱⇒ 最小値（最も学力が低い児童生徒が属する学力のレベル）

グラフの縦軸は、学力のレベルを表しています。

目盛りは、個人結果票の学力のレベル（12段階）を表しています。

各レベルの間は、A、B、Cの3段階に分かれています。

よって、全体では36段階（12×3）になります。



3 「主体的・対話的で深い学び」の視点による質問調査

(1) 概要

「主体的・対話的で深い学び」の視点による質問調査は、県の事業により、一部の学校で取り入れている取組で、教員と児童生徒が授業の振り返りを行うための質問調査です。概要についてお伝えします。

まずは1か月程度の授業実践をした後に、教員と児童生徒がそれぞれ質問調査を行います。

そして質問調査の結果をもとに、「主体的・対話的で深い学び」の視点から見つけた授業の良さを共有したり、改善したりする点、その改善方法を検討します。

その後、共有・検討したことを基に授業改善に取り組み、一定期間の授業実践の後に再度質問調査を行うことで授業改善の進捗を可視化することができます。



(2) 質問調査項目

質問項目は、「主体的・対話的で深い学び」の視点によるもので、資料左側の教員用の質問と資料右側の児童生徒用の質問が対応しています。

教員用質問調査		児童生徒用質問調査		
1	子供の実態を把握した上で、子供が主体的に学べるような課題設定や授業展開、それらを踏まえた教材研究や授業づくりを意識したこと	1	授業の始めに、今日はどうな学習をするのかをつかんでから学習に取り組んだこと	主に 主体的な 学び
2	授業の終わりに、子供たちが振り返る場面を設定したこと	2	授業の終わりに、授業で学んだことをふり返り、自分がわかったことやわからなかったことを自覚したこと	
3	わからないことなどを質問しやすい雰囲気がつくられるように工夫したこと	3	わからないことなどを質問しやすい雰囲気の中で授業が行われたこと	
4	グループやペアで、話し合ったり、意見や考えを出し合ったりして課題を解決する場面を設定したこと	4	グループやペアで、話し合ったり、意見や考えを出し合ったりして課題を解決したこと	主に 対話的な 学び
5	課題の解決に向けて、話し合ったり交流したりすることで、子供たちが自分の考えをしっかりと持てるように工夫したこと	5	課題の解決に向けて、話し合ったり交流したりしたことで、自分の考えをしっかりと持てるようになったこと	
6	対話等を通じて、多様な情報や考えを収集させたり、自分にはない異なる考えの良さに気付かせたりしたこと	6	話し合いや集めた資料から、自分の考え方が変わったり、深まったりしたこと	
7	授業を通して学習した内容について、さらにくわしく知りたい、学びたいと思うような工夫をしたこと	7	授業を通して学んだ内容について、さらにくわしく知りたい、学びたいと思ったこと	主に 深い学び
8	学びの系統性を意識して、授業中の子供に対する声掛けなどを工夫したこと	8	授業で学んだことが、以前に学習した知識とつながったこと	
9	授業で学んだことが生活のどの場面につながるかを意識して授業をしたこと	9	授業で学んだことを、日常生活に生かせると感じたこと	
10	子供が教師の指示に従って受身的に学ぶのではなく、子供が学びたい、話し合いたいという思いを持って学習に取り組んでいるか、授業中に見取って、把握していること			

(3) 調査資料（研修用資料サイト掲載）

「主体的・対話的で深い学び」の視点による質問調査に活用するデータは、使用方法の説明 PDF 資料とともに県立総合教育センターの HP 内にある、義務教育指導課研修用資料サイトにアップロードされています。

ID やパスワード不要でダウンロードできますので、ぜひご活用ください。

義務教育指導課 研修用資料サイト
https://ecsweb.center.spec.ed.jp/gimushi/page_20240411093409



